

ほとけの 混和会だより

平成二十八年六月

東光院

仏の混和会

第120号



比叡山延暦寺の戒壇院

比叡山の根本中堂にて
お勤めさせて頂きました。

五月二六日から二九日までの四日間比叡山の根本中堂にて、お勤めさせて頂きました。お勤めと言っても、修行と言う事では無く、根本中堂にて、参拝された人々に比叡山の成り立ちや境内の様々なお堂の説明をさせて頂いたのです。よって、この紙面に於いては、比叡山の一番大事な建物である戒壇院と言う建物を説明させて頂きます。この戒壇院と言う建物は、

僧侶として守るべき戒めと規律、いわゆる戒律を授与して下さる建物です。

最澄様は奈良の東大寺にて、戒律を受けましたが、その当時の戒律は、己一人悟りの境地に至る小乗戒と言うもので利己主義的なものでした。そこで最澄様は、「この乱世に於いて安心の抱ける社会を築くには、共に悟りの境地に至る、大乘戒が必要である、比叡山に大乘戒を授ける権限を与えて下さい。」と嵯峨天皇に戒壇院の設立を懇願しておりました。しかし、これまでの仏教界を差配していた南都仏教の威厳が損なわれるなどと、奈良の仏教会よりはげしい反対を受け、とうとう最澄様の存命中には認められず、お亡くなりなられて七日の後に勅許が下ったのでした。以来、比叡山が大乗仏教の道場として、日蓮宗の日蓮聖人、曹洞宗の道元禅師や臨済宗の栄西禅師、他にも法然様や親鸞様、蓮如様、一遍様など各宗の御祖師様がこの戒壇院で大乘戒を授与されてそれぞれの教えの専門道場として一宗一派が開かれて行きました。よって比叡山は日本仏教の母山とも言われております。

日本の仏様

No. 10



日本仏教に登場する仏様を、毎号少しずつご紹介。今回は天部の『梵天』について紹介します。

●梵天

梵天は、四つの顔に四つの腕を持ち、四匹のガチョウに乗った姿をした、国土安穩や仏教守護と言った仏教界を見守っている神様です。梵天の本名は「ブラフマン」と言い、元々はヒンドゥー教の神様でした。宇宙を作り出した創造主であり、全ての生き物の長であると言われ、他の神々の相談役のような存在です。

ヒンドゥー教においてブラフマンは、宇宙が誕生した時、宇宙に「地・水・火・風・空」の自然に必要な五つの要素を作り出したとされています。更にブラフマンは作り出した水の中に種をまき、その種はやがて黄金の卵となり、その卵を半分に分けることで天と地を作り、この世界が出来たとされています。

そんなインドにおける創造主である凄異な神様がなせ、仏教に取り入れられたのかと言いますと、仏教誕生に関わった神様であった事が一番の理由だと思えます。

仏教とは言わずもがな、インドにて悟りを開かれたお釈迦様の教えから生まれた教えです。しかし、お釈迦様は悟りを開かれた時、「私が悟りを開いた内容は難しすぎる。



東寺 (国宝) 梵天座像 亮澄拝

人々に話しても理解出来ないだろう。」と、当初は誰かに説法をするつもりはありませんでした。しかし、そこにインド界最高の神ブラフマンが現れ、「どうか、その悟った内容を皆に説いてください。」と何度も何度も説得をした結果、お釈迦様は悟りの内容を説くようになり、それが後に仏教となっていく訳です。このやり取りを「梵天勧請」と呼びます。そのため、仏教という宗教が形を成していく中でお釈迦様が説かれた教えを見守って欲しいと願い、ヒンドゥー教の神様でありながら、梵天と名前を変えて仏教の教えに取り入れられました。梵天を見ると、台座となっているガチョウに目が行くかと思えます。このガチョウは、聖なる鳥とされ、純粋さや神の知識を司り、高次元の存在への到達者であること示し、かつてヒンドゥー教界の最高の神であった事を表しています。凄異な神様であった事の証がガチョウというのにはちょっと可愛いですね。

おまけ

古代インドで使われていたサンスクリット語を「梵語」と言うのは、この梵天が作った言語と言う意味で梵語と呼ばれるそうです。



ねーねーお坊さん、ところで、今回の比叡山のお勤めは、どうだったの？



おーおーそうじゃな肝心なお話を忘れていたよ。

この度のお勤めは、根本中堂で最澄様の御心や比叡山の説明をすることが、私の役目なんじゃが、根本中堂のお勤めは、今回で二回目なんじゃ。

前回は平成二十六年の九月とても緊張したけど今回は少し余裕も出て、気がゆるんでしまったようなんじゃ。宿泊場所は総持房と言う建物で前回同様、廊下はギシギシときしむ昔の建物なんじゃ。この総持房には、一人のおばさんが常駐してくれて、私と同じように地方から来られたお坊さん達に食事を作って下さり、お昼は四〜五人で食事を頂いておったのじゃよ。すると中には「これ置いていくから夜にでも飲んで下さい」とお酒を置いていって下さる人もおられたのじゃよ。

私は、「此は有り難い」と初日は余裕でお酒を頂き「ゴーゴー」と大きなイビキをかきながら休んでしまったのじゃよ。すると「チーン、チーン」と言う音や、己のイビキなどになさながら、「お前は此処になしに生まれて来たのじゃ」「この世になしに生まれて来たのじゃ」などと問われているような気がし

夏に向かって



暦の上では夏を迎え、二〇一六年も既に半分が過ぎようとしている今日この頃、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

深大寺では、五月末日調布市の姉妹都市である長野県木島平村の村長ほか、近隣高校の生徒が扮した早乙女さんらが来山し、豊作祈願の田植え式を行いました。ここで植えた木島平産の稲の苗は、深大寺境内にて栽培し、秋には僅かながらも実りを施してくれることかと思えます。



さて、話は変わりますが、私の深大寺へ通わせて頂く生活も二年目を迎えることとなりました。深大寺は年間を通して多くの行事があるお寺ですが、一通りの行事を経験したことで今年は昨年よりも

てあわてて飛び起きたのじゃ。

宿舎は幽霊の住処だった

すっかり目が覚めてしまった私は、改めてこの総持房のいわれについて調べて見たのじゃよ。すると此処は幽霊の住処だったことが解ったのじゃ。



それ破戒僧を戒める幽霊なんじゃよ。

最澄様が比叡山を開いて、一五〇年ほど時が過ぎた頃、お山の生活は次第に乱れて、ふもとに酒や肉を買いに行く破戒僧が横行しはじめたそうなんじゃ。それを見かねた慈忍と言う僧侶は、生前から「自分は、死んだ後も仏法がすたれないように、お山がみだれないように一本足と一つ目の姿に扮して胸から吊した鐘を鳴らして破戒僧を戒め御山をお守りする」という誓いを立ててお亡くなりになったそうなんじゃ。この総持房には、その慈忍様がお祭りされていたのじゃよ「チーン、チーン」と言う音は慈忍様の戒めの鐘の音だったんじゃ。

最澄様の御教え「悪事は己に向かえ、好事は他に与え、己を忘れて他を利するは、慈悲の極み也」と言う菩薩としての生き方に、この世に生まれたことの意義が見いだせるよう努めたのじゃよ、と慈忍様に戒められたのじゃよ、共に勤めて行こうね。

余裕を持って一年を送ることが出来るかもしれません。

しかし、それと同時にひとつひとつの行事を迎えるたびに昨今の今頃を思い出し、改めて一年という月日があつという間に過ぎ去っていくさまを実感させられ、そしてこの感覚は年々早くなつていくものなのかと思えます。



いつも通りの毎日が送れるという事はとてもありがたいことですが、変化のない日々が続いてしまっています。ですから、私自身面倒くさがりな性格ではありますが、「人生とは出会いと別れ」、当たり前の日常、一瞬一瞬を大切にする一方で、新しい出会いや、懐かしい出会いを求め、日々を特別なもの出来るよう、行動に移せる人間でありたいと、夏に向け若草伸びる季節の中、ふと思う今日この頃です。



亮敬拝